366. 2) Schmidt, F. (1868) Reisen Amurl. u. Sachal. 190-191, t. 8, f. 1-7.
3) Shimizu, T. (1965) Research Rep. Kisosansen Survey Team No. 2, 573-593.
4) Ito, K. (1963) Sapporo Bull. Bot. Gard. Hokkaido Univ. No. 1, 1-102.

* * * *

木曽三川河口資源調査団の一員として，私は，1964・65 の両年，揖斐，長良，木曽のいわゆる木曽三川の河口部において，水生植物の調査をおこなった。その折，エゾウキヤガラに似た植物が，挺水植物の最深部を占めて，かなり大量に生育しているのをみた。この植物の分類について，しばらく，疑問を感じていたが，その後，同域からエゾウキヤガラそのものを発見し，比較栽培を続けるとともに，他地域でのエゾウキヤガラの観察に加えて，小山鉄夫氏の御教示を頂くことができ，漸く，新種であると確信するに至った。すなわち，**イセウキヤガラ**である。これは形態学的には，葉身が鋭三稜形であること，栄養条件のいかんにかかわらず小穂がほとんど常に1個であること，刺針状花被片が6ないし7本であることなどが，エゾウキヤガラと異る重要な特徴である。また，生態学的には，イセウキヤガラはシオクグ帯以深に生育し，満潮時には完全に水没するが，エゾウキヤガラの領域はシオクグ帯以浅の全く冠水しないところである。耐塩性の差といえよう。さらに花期は7月ないし8月であり，同域のエゾウキヤガラに比して1ケ月以上の差が認められる。

○オバコの葯の色（水島正美）Masami MIZUSHIMA: Colour of anthers in *Plantago asiatica* L.

オオバコは雌蕋先熟の花が無限花序をなしてつく。各地で開花したものを注意して見て来た結果，葯に薄藤色と黄白色の両様があるのを知った。両者は個体によって一定してはいるが，同一地点に混生している。花柱はどちらも白く（草木図説の語を借りれば，水白色の表現がふさわしい），花被にも目に立つ程の色の差はない。慾斎の本は葯の色がよく記してあるので参考になるが，オオバコの条下には帯紫色の旨を明記しており，事実此の方が各地に普通に見られる。黄白葯の個体は白花品或は淡色品に相当する場合と考えて良く，品種の級位でなら命名に値する。本種の葯の色は腊葉にすると容易に変色してしまうので，リンネが命名した時の個体はどちらであったかの決定は不可能であろう。そこで普通な薄藤色の葯を持つものにオオバコの名を残し，黄白色の一形を**シロオオバコ**と新称し，次のように記載する。邦産種のかかる変異に対しては，シロバナハクサンオオバコが命名されたに過ぎない。

Plantago asiatica L. f. **ochranthera** Mizushima, f. nov.

A plantis vulgaribus cum antheris lilacinis differt haec forma isdem ochroleucis.

Holotype: on gravelly shaded wayside along the west coast of Lake Nakatsuna, 830 m alt. Nakatsuna, Ômachi, Nagano Pref., Honshu (Aug. 11, 1957, M. Mizushima, 14798)—MAK-4735.

（東京都立大学　牧野標本館　水島正美）